



バロックの哲学

あるいは〈野生のリアリズム〉

アダム・タカハシ

adam.takahashi@gmail.com

Philosophy ≠ 「20世紀の哲学」

18世紀までの「哲学」

= 「自然科学」 + 「社会科学」

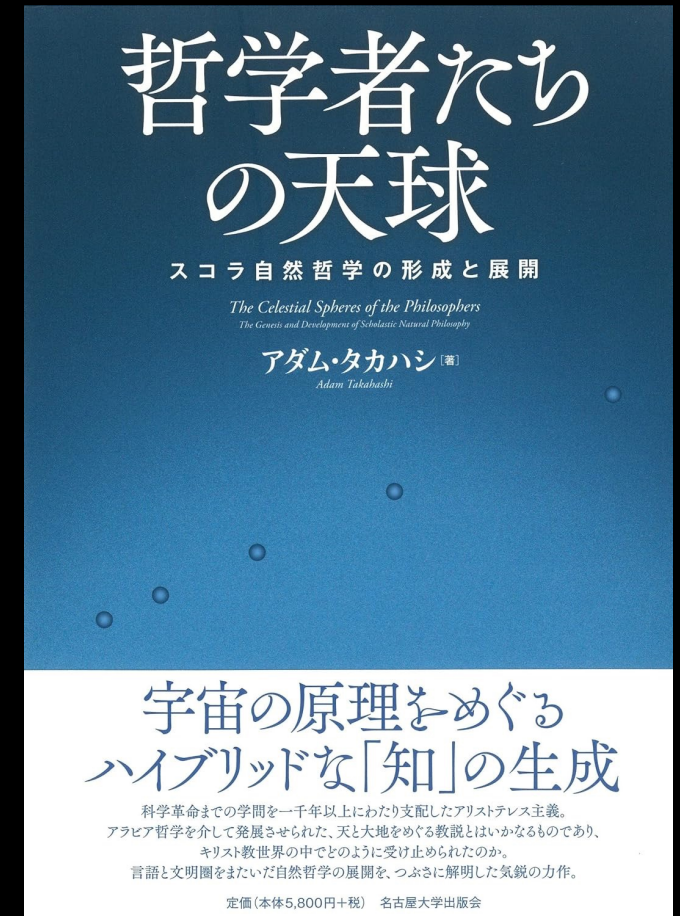
e.g. ニュートン「自然哲学」，

アダム・スミス「道徳哲学」

→20世紀における「哲学」の専門化

= 大きなテーマ：認識，言語，心

= 「現象学」 or 「分析哲学」



宇宙の原理をめぐる
ハイブリッドな「知」の生成

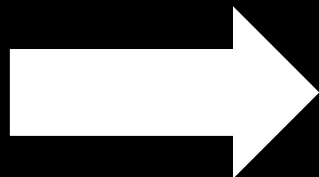
科学革命までの学問を一千年以上にわたり支配したアリストテレス主義。
アラビア哲学を介して発展させられた、天と大地をめぐる教義とはいかなるものであり、
キリスト教世界の中でどのように受け止められたのか。
言語と文明圏をまたいだ自然哲学の展開を、つぶさに解明した気鋭の力作。

定価(本体5,800円+税) 名古屋大学出版会

20世紀の哲学的課題

(現象学・分析哲学)

- ・ 認識
- ・ 言語
- ・ 心 (精神)
- ・ 存在 . . . etc.



21世紀の哲学的課題

- ・ 自然, 環境
- ・ 技術, 情報
- ・ 生命, 身体, 統治
- ・ ジェンダー, 性
- ・ 偶然性, リアリティー, etc.



神 (自然), 人間, 世界という <問い>

檜垣「バロック哲学の展望」(1)

- ・ ウィトゲンシュタインやハイデガーによって代表される二十世紀哲学に対して、「言語よりも生命や質料性を重視し、言語によって構築される現実よりも自然進化的過程に対する信を基盤」とする「自然哲学的な流れ」（『バロックの哲学』， p. 39）
→ 「バロックの哲学」によって定位される。

檜垣「バロック哲学の展望」(2)

坂部＝ベンヤミンから取り出される「バロック哲学」とは、

「「個」の感受性を重視しながら、同時に「理念」のリアリズムを手放さず、「個」が成立するシステムをそのままに肯定すること。そこで「個」と「理念」、「個」と「全体」の関係が提示する、けっして調和的ではないが、対立的でも闘争的なわけでもない側面をきわだたせること。そして、それを近代的時間の極限としての、時間－歴史的な進歩性を廃棄することによって引き立てること。」 (p. 40)

→ 〈去勢された近代ではなく、野生の近代の開放による、脱近代のプロジェクト〉 (近藤和敬談)

『モデルニテ・バロック』 (2005年)

坂部恵 (1936-2009)

- 『仮面の解釈学』 (1976)
『理性の不安』 (カント論) (1976)
『和辻哲郎』 (1986/2000)
『不在の歌』 (九鬼周造論) (1990)
『かたり』 (1990/2008)
『ヨーロッパ精神史入門』 (1997)
『坂部恵集』 (全五巻) (2006-2007)



「バロックの復権は哲学史をどう書きかえるか」(1)

『モデルニテ・バロック』

「バロックの復権は哲学史をどう書きかえるか」 (2001)

① ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』

「ベンヤミンの方法意識のなかで、個の感覚とともに、スコラ的リアリズムス（实在論・実念論）が、両極端の合致のようにして重なりあい、シュールリアリズム、表現主義からバロック悲劇までを一望のもとに収める視圏を獲得します。」 (p. 43)

「バロックの復権は哲学史をどう書きかえるか」(2)

② ボードレール「現代生活の画家」(1863)

「モデルニテとは、一時的なもの、うつろいやすいもの、偶発的なもので、これが芸術の半分の部分をなし、他の半分が、永遠なもの、不易なものである。昔の画家の一人一人にとって、一個ずつのモデルニテがあったのだ。」

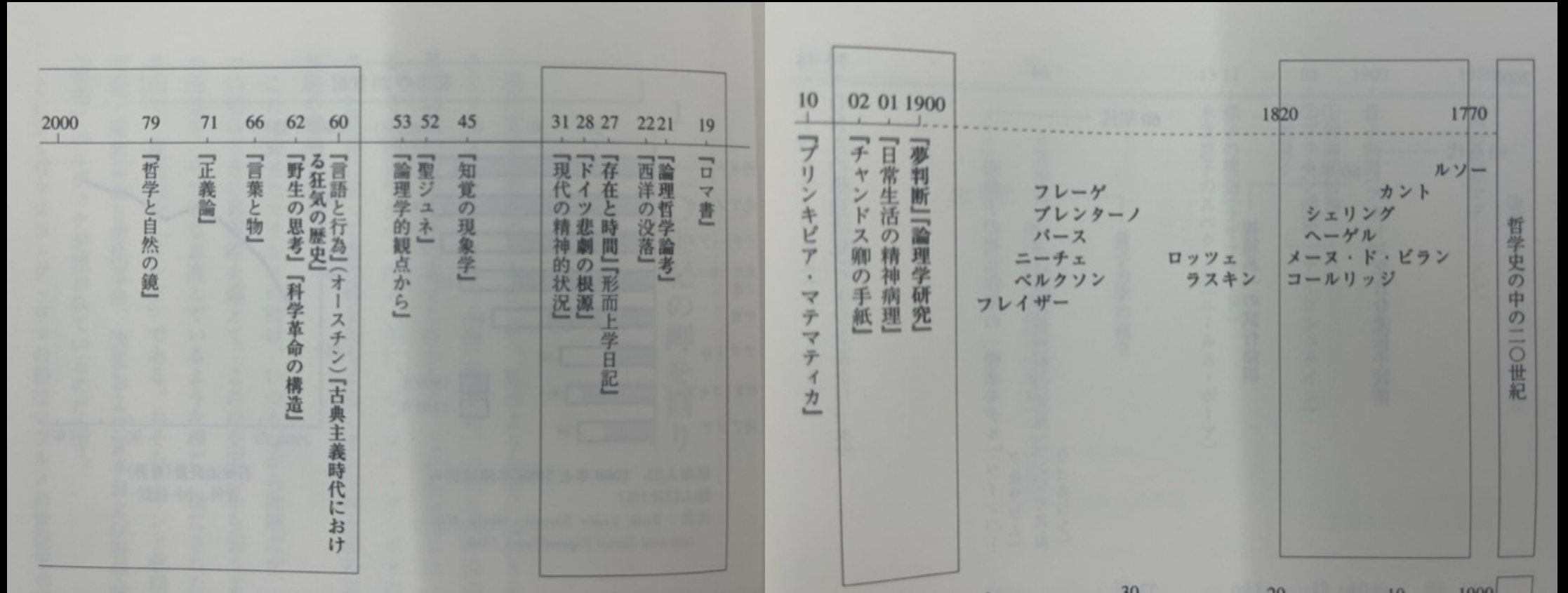
= 「時間と時間を超えたものとの総合としてのモデルニテ」

「バロックの復権は哲学史をどう書きかえるか」(3)

前ページのボードレールの引用の後に、わざわざ傍点も振りつつ、坂部は次のような注記を行う。

「（わが国でモデルニテやモデルネを話題にするひとびとがこのあたりの基本了解を十分承知した上でそうしているのかどうか、わたくしには多少の疑問があります。このたりの基本了解を共有していれば、安易に「ポスト・モダン」などと概念の上積みをすることはありえないはずでしょう。）」 (p. 49)

「戦乱・革命と遠い記憶，火山の上の祝祭：哲学史の中の二十世紀」(1) (初出『二十世紀の定義』2000)



「戦乱・革命と遠い記憶，火山の上の祝祭」(2)

① 1900年

『論理学研究』 『夢判断』 「ニーチェの狂死」

② 1920年代

『論理哲学論考』 『存在と時間』 『ドイツ悲劇の根源』

③ 1960年代

『科学革命の構造』 『野生の思考』 『狂気の歴史』

「戦乱・革命と遠い記憶，火山の上の祝祭」(3)

② 1920年代

『論考』 『存在と時間』 『ドイツ悲劇の根源』

・バルト 『ロマ書』 (1919)

・シュペンングラー 『西洋の没落』 (1922)

・エリオット 『荒地』

31	28	27	22	21	19
『現代の精神的状況』	『ドイツ悲劇の根源』	『存在と時間』形而上学日記	『西洋の没落』	『論理哲学論考』	『ロマ書』

「戦乱・革命と遠い記憶，火山の上の祝祭」(4)

「[ベンヤミンは] 「モデルネ」「モデルニテ」としてのわれわれの時代のはじまりを，この語をその都度の**時代的なものと永遠的なものの結合**として定義したボードレーを典型とする十九世紀に見定め，その**ボードレーをむしろ遅れてきたバロック人**と見る・・・。」（『モデルニテ・バロック』）

＝「バロックの哲学」というより「モデルニテの哲学」？

山内・檜垣「バロックの哲学」

①「バロックの哲学」

『中世哲学入門』 『世界哲学史5』 / 『バロックの哲学』

②ドゥルーズ

『ドゥルーズ 内在性の形而上学』 /

『ドゥルーズ 解けない問いを生きる』

③自然と時間

『湯殿山の哲学』 / 『哲学者、競馬場へ行く』

山内的「バロックの哲学」



山内志朗
Yamachi Shiro

中世哲学入門

存在の海をめぐる思想史

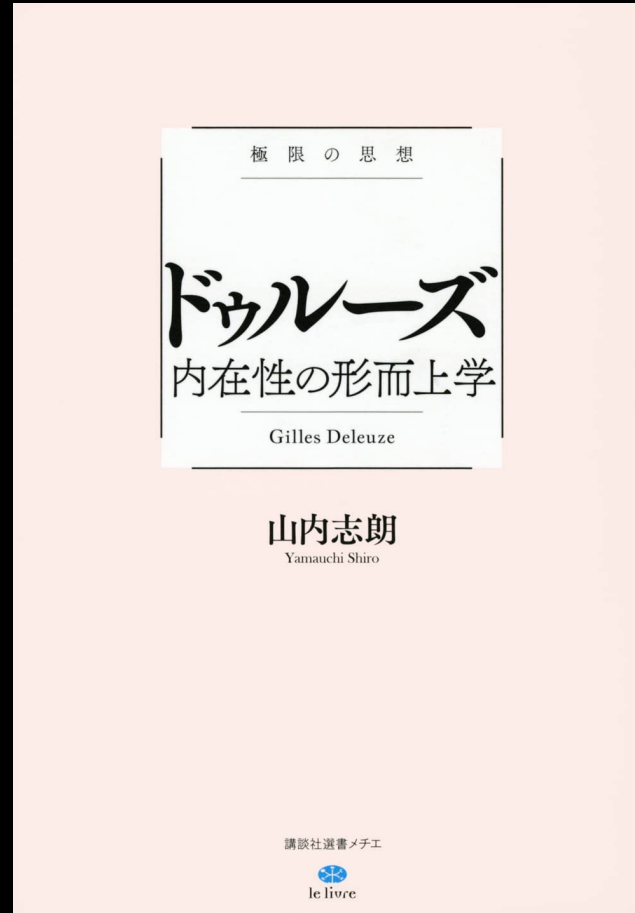
CHIKUMA SHINSHO



第一人者による
入門書決定版

筑摩書房 定価1265円(10%税込)

ちくま新書



極限の思想

ドゥルーズ

内在性の形而上学

Gilles Deleuze

山内志朗
Yamachi Shiro

講談社選書メチエ

le livre



山内志朗
Yamachi Shiro

湯殿山の哲学

修験と花と存在と

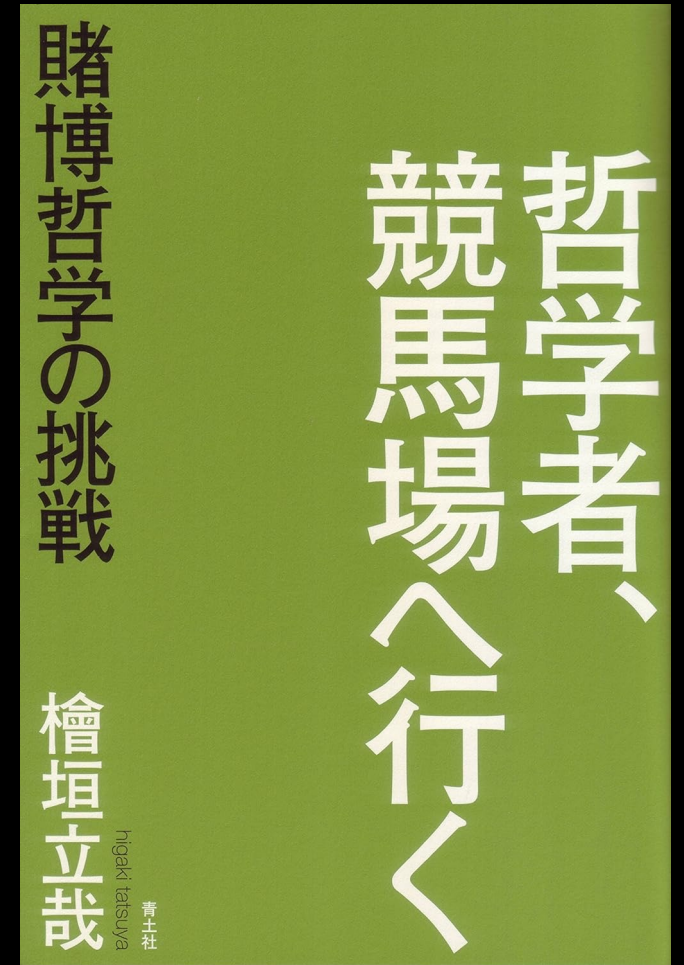
私はいま、ここにいます
存在の呼び声に忘れた、長い旅の果てに

湯殿山と西洋中世哲学とが交叉する地点、そこに神と人との、
普遍と個物との、そして存在と花との合一が……。

これぞ山内哲学の到達点——香山リカ

ぶねらま舎 定価(本体2500円+税)

檜垣的「バロックの哲学」



山内的「バロックの哲学」



山内志朗
Yamachi Shiro

中世哲学入門

存在の海をめぐる思想史

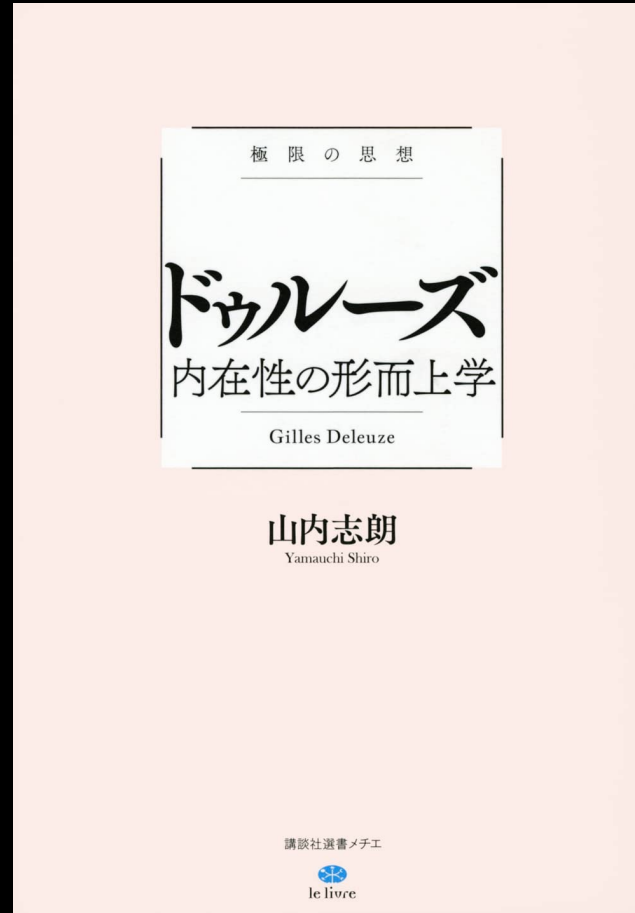
CHIKUMA SHINSHO



第一人者による
入門書決定版

筑摩書房 定価1265円(10%税込)

ちくま新書



極限の思想

ドゥルーズ

内在性の形而上学

Gilles Deleuze

山内志朗
Yamachi Shiro

講談社選書メチエ

le livre



山内志朗
Yamachi Shiro

湯殿山の哲学

修験と花と存在と

私はいま、ここにいます

存在の呼び声に忘れた、長い旅の果てに

湯殿山と西洋中世哲学とが交叉する地点、そこに神と人との、
普遍と個物との、そして存在と花との合一が……。

これぞ山内哲学の到達点——香山リカ

ぶねらま舎 定価(本体2500円+税)

山内『世界哲学史5 中世III バロックの哲学』

「第一章：西洋中世から近世へ，第三節：バロック哲学への道」

「ドゥルーズは「襞」ということにバロック性を見出したが，その現れをモナド論に見出すこともできる。つまり，個体たるモナドが，無限に多くのモナドからなる宇宙を表現することで個性を実現することは，無限性と有限性が動的に交錯するものであり，そこにバロックの現れをみることもできる。」

山内 『ドゥルーズ 内在性の形而上学』(1)

「第四章：ドゥルーズと狂気」

- ・ 「ドゥルーズにとってニーチェはいつも決定的である。」 (p. 126) ←クロソウスキーという媒介者

「私にはクロソウスキーがドゥルーズにおける一義性理解をかなり準備しているように感じる。ドゥンス・スコトゥスの一義性も概念における一義性という静態的なものではなく、主意主義に基づく愛や聖霊の強度空間を語るために準備された強度に満ちたものだったと思う。…それは**享受の可能性**を確保するためだった。…ドゥルーズの中に**神と被造物の絆**という**問題はない**としても、

山内『ドゥルーズ 内在性の形而上学』(2)

「第四章：ドゥルーズと狂気」

(承前) 享受の可能性を追求した思想的系譜ということでは、アウグスティヌス以来の流れを正統に継承しており、しかもその流れにニーチェも組み入れられるというのは、誤解であろうと私の確信なのだ。つまり、ここでシュミラクルとファンタスムの議論の中に、一義性の論点を感じ取るべきなのだ。」 (136)

「肝要なのは、クロソウスキーのニーチェ理解とドゥンス・スコトウスを結びつけることだ。ニーチェの「悪循環たる神」ということと、…存在の一義性を結びつけるのがクロソウスキーなのだ。」 (137)

山内『湯殿山の哲学』(1)：「自然」

「四月の最初あたりが一番食べ物のなくなる頃だ。漬物も食べ尽くし、残っているとしても発酵が進んで酸味が強くなりすぎている。……子供の頃、春の訪れは何か重苦しいものだといつも感じていた。春とは、もの悲しさやもの狂おしさがひっきりなしに湧き起こる季節だとしても、この重苦しさとは何なのか、釈然としないまま、歳を重ねてしまった。」（60-61頁）

「自然を無邪気に賛美する人を、森の中に住むものは嫌悪する。自然を憎悪し、その憎悪のままに和解して、愛憎拮抗するように自然を愛するのでなければ、自然への愛好は街人の気まぐれである。」（69頁）

山内『湯殿山の哲学』(2)：「瞬間」

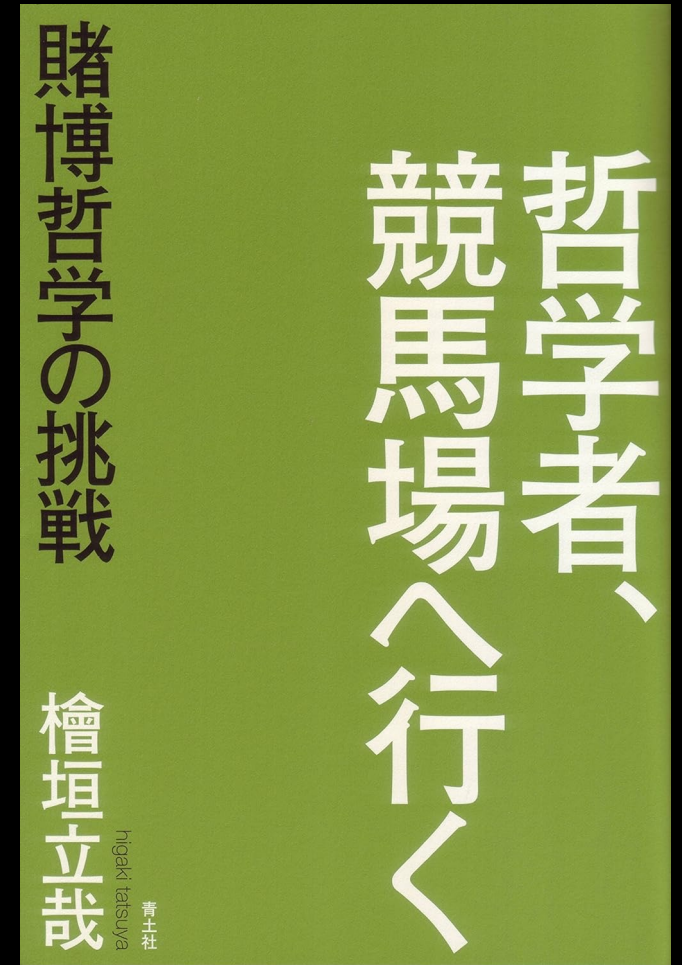
「春を告げる「こぶし」の花もあわただしく過ぎていく。そうこうしているうちに、山肌は、どっしりとした山塊の表面というより、春の衣を身につけたようにうっすらと薄黄緑に染まり始める。そうして、**やっところかしこにヤマザクラの花が姿を現す。**」 (32)

「**「存在する」**とは、荒涼にして不動なる砂漠とか、安定した大地とか、惜しみなき恵みを常に送り続ける太陽などではなく、**「花」**として表象されるべきではないか。」 (37)

山内『湯殿山の哲学』(3)：「このものの性」

「キャヴェル（スタンリー・カヴェル）が述べるように、自伝という形式が哲学のあり方と深い関連を持つ以上、哲学は普遍的な声・ロゴスで抽象的な概念を辿るように語られるだけではなく、別の声で具体的な事物を通して語ることもできるように思われる。西田幾多郎も、〈別の声で〉語る哲学をはじめること、彼の哲学を作り上げることができた。個別性の中に普遍性を見出すことが哲学であるとするれば、そこにドゥンス・スコトゥスの〈このものの性〉と通底するものを見出すことができる。」（200）

檜垣的「バロックの哲学」



檜垣『ドゥルーズ』(1)

・ 「近代以降の場面とは、… [前近代までの神に代わって世界の中心の位置にたった] 「人間」がすでに自己崩壊し、問いを解きうる基盤が失われたことが、つまりもはや問いは解けないことが突きつけられている場面なのである。」 (23)

→ 「解けないからこそ、そこで新たに何ができるのかを模索するという前向きな賭けがなされているように見える」

= 「人間」の枠組みを超えたりアリティ

= 「生命」 (解けない問いを生きる存在)

檜垣『ドゥルーズ』(2)

・「現象学が〈意識の哲学〉の流れを引き継いでいることに関わっている。それに対してドゥルーズは、ベルクソンの〈自然の哲学〉という系譜を自覚的にたどるのである。」(50)

→「意識」=自己／「自然」=生命=潜在的な多様体

・「ドゥルーズにおいて倫理を語るならば、〈私〉とは何か、〈私〉はどうあるべきか、という議論は意味を失うのである。むしろ、個体に基づいた振る舞いの倫理が設定されるべきである。」(100) = 〈私〉ではない〈個体〉が生きること

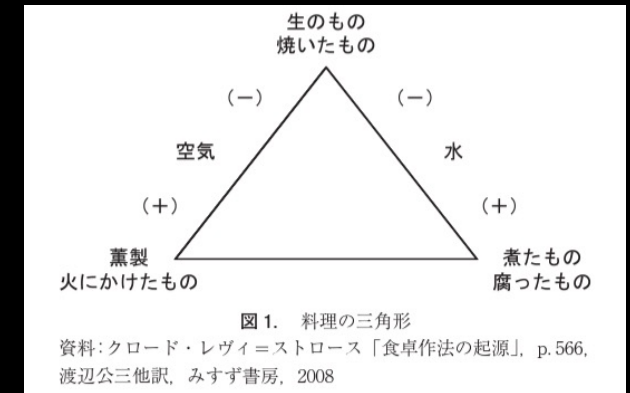
※檜垣の「生命論」の移り変わり：初期のシステム論的なものからフーコー的な議論へ（参照『生命と身体』における変遷）

檜垣『バロックの哲学』(1)

- ・レヴィ＝ストロース『神話論理』への注目

「レヴィ＝ストロースの仕事の本領は、典型的な構造主義と言われる初期の分析（＝『親族の基本構造』（1949）『野生の思考』（1962））よりも、むしろより複雑さをました『神話論理』においてこそ認められるべきではないか。」（p. 279）

- ・「料理の三角形」＝「**感覚的経験の自然の組織**」
＝内容を捨象する形式的な構造主義と異なる



檜垣『バロックの哲学』(2)

- ・『神話論理』と「褶曲（しゅうきょく）」という作用

「[『神話論理』の] 第四卷冒頭で、ローキー山脈の「地層」やその「断層」あるいは「褶曲」を、そこを横切る河川などの侵食が剥き出しに露呈させることを示す記述は注目されるべきである。」 (284)

⇔ 「湯殿山は襞である」という山内の『湯殿山の哲学』の記述

- ・注での言及「『神話論理』の段階のレヴィ＝ストロースは、言語のモデルから取った構造主義ではなく、ある種の**自然的地質学的無意識**とでもいう事情を全面的に示している。」 (330)

檜垣『哲学者、競馬場へ行く』：瞬間と生命

・「競馬とは淡々とながれていく時間の中で、そうした時間を生きていくメチエ＝技法なのだということを学んだのである。いいかえれば私たちが生きていることは、時間を生きることとして、ただ眼の前にある競馬を眺めつづけていること以外の何者でもないということを学んだのである。競馬を見るもの、賭けをして生きるもの、偶然性の中で喜び悲しみ、驚き落ち込む、いわばこの世に生きているすべての人たちが学ぶべきことである。」

(13)

・「競馬場かうインズ（＝場外馬券売り場）に向かう以外に自分の身の持ちようがない日々を過ごすなかで、オグリキャップの走る姿はとにかく驚異だった。」

「バロックの哲学」あるいは「野生のリアリズム」

- ・山内・檜垣による「バロックの哲学」は、ベンヤミン、ドゥルーズ、そして坂部の議論を継承することで、神経症的な近代ではなく、ボードレーやニーチェが垣間見せたような「モデルニテ」を開放し、かつ徹底するプロジェクトであった。
- ・そのプロジェクトは、個体一つ一つが襞のように織りなす世界を自然史的かつ生命論的な地平から、そして単なる通時的な歴史展開を超えて野生的に思考することを人々に促すだろう。
- ・カントは「神、不死、自由」を理念として掲げたが、「神（自然）、世界、人間」が新たな「解かれざる問い＝理念」として哲学的な問題系を設定するだろう。